

## 第 3 章 調査研究

---

## 1 調査研究の概要

調査研究では、児童・生徒に対して、学校生活や自分自身のこと、いじめの経験など、児童・生徒、教員、保護者、都民（地域関係者）、関係機関の職員に対して、いじめに関する意識などを質問紙にて調査した。

- 児童・生徒を対象とした学校生活などについての調査結果の分析
  - 授業について ○いじめの経験 など
- 児童・生徒、教員、保護者、都民（地域関係者）、関係機関の職員を対象としたいじめ問題についての調査結果の分析
  - いじめに関する意識 ○いじめ問題解決のためにできること など

・平成7年度東京都立教育研究所「いじめ問題の研究」では、いじめの心理と構造等に関する研究を行った。当時と同じ項目の調査を実施し、当時の児童・生徒の意識と現在の児童・生徒の意識とを比較するとともに、インターネットやメール等のマナーやルール等の新たな項目を追加した。

### ● 調査内容

- ・いじめに関する意識
  - 【児童・生徒、教員、保護者、都民（地域関係者）、関係機関の職員】
- ・いじめと学習指導に関する意識
  - 【児童・生徒、教員のみ】
- ・いじめの経験、自分自身のことについて
  - 【児童・生徒のみ】

なお、いじめの経験については、東京都教育委員会で行っている「児童・生徒の問題行動等の実態について」の調査内容である「いじめの態様」から、「冷やかしの行為」等の行為についての経験を、期間を限定せずに尋ねた。

### ● 調査方法 質問紙調査

### ● 調査対象及び対象人数

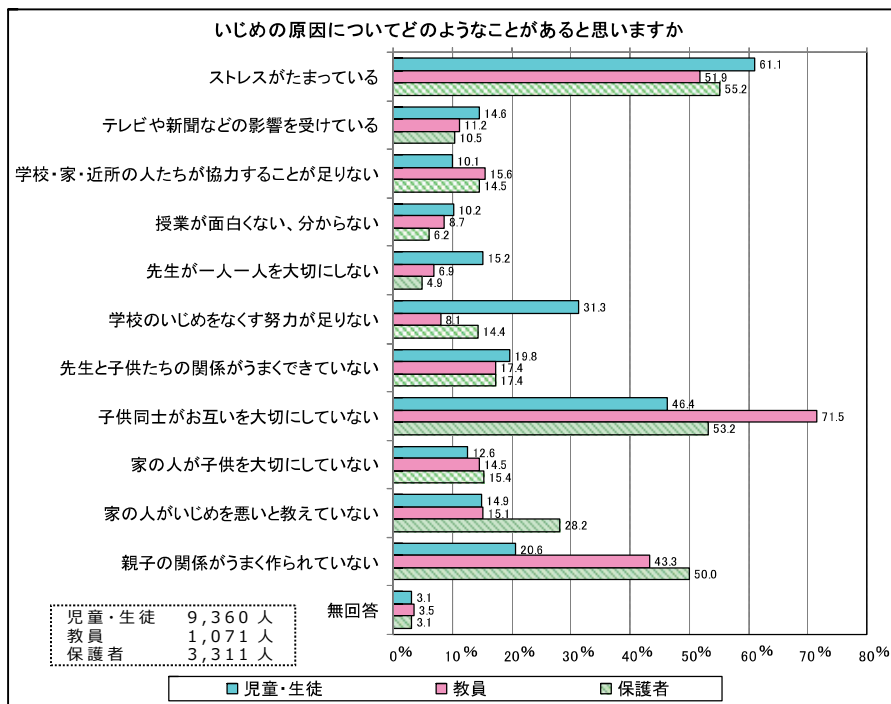
| 対象        | 人数      | 備考                                                                                           |
|-----------|---------|----------------------------------------------------------------------------------------------|
| 児童・生徒     | 9,360人  | 小学校第4学年～第6学年 3,720人<br>中学校第1学年～第3学年 3,302人<br>高等学校第1学年～第3学年 2,146人<br>特別支援学校小学部、中学部、高等部 192人 |
| 教員        | 1,071人  |                                                                                              |
| 保護者       | 3,311人  |                                                                                              |
| 都民（地域関係者） | 634人    | 地域関係者、学校評議員など                                                                                |
| 関係機関の職員   | 311人    | 教育委員会、子育て支援センター、警察、児童館、図書館等の職員                                                               |
| 合計        | 14,687人 |                                                                                              |

小学校(17校)、中学校(10校)、高等学校(6校)、特別支援学校(4校)

### ● 調査期間 平成25年1～2月

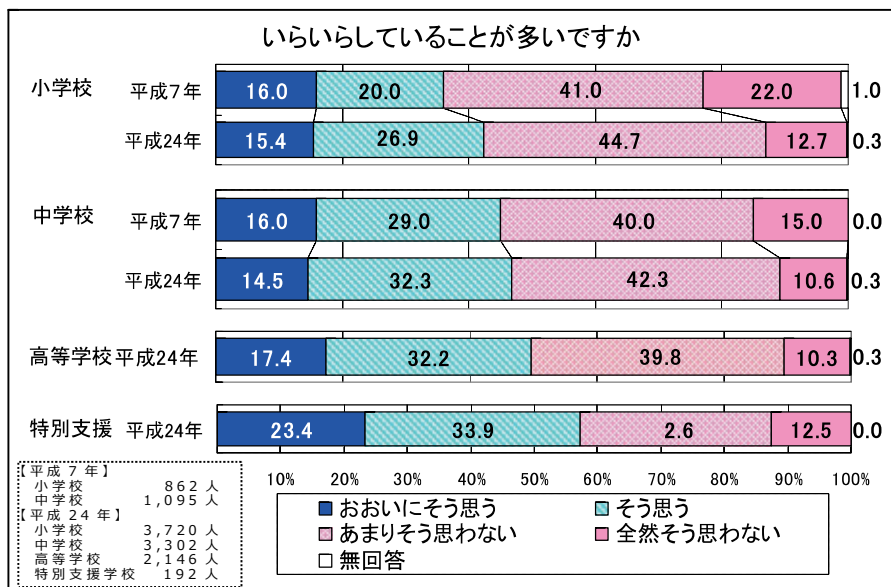
## 2 児童・生徒のいじめに関する意識

### ● いじめの原因について（児童・生徒、教員、保護者）【複数回答】



児童・生徒、教員、保護者共に原因として多く挙げている項目は、差はあるものの、「ストレスがたまっている」、「子供同士がお互いを大切にしていない」であった。「学校のいじめをなくす努力が足りない」の項目は児童・生徒は31.3%であり、教員、保護者よりも割合が高かった。また、「先生が一人一人を大切にしない」の項目も、児童・生徒の意識と教員、保護者の意識の差が見られる項目であり、児童・生徒の15.2%が「先生が一人一人を大切にしない」ことが、いじめの原因であると考えていることが分かった。

### ● 自分自身のことについて（児童・生徒）【単数回答】

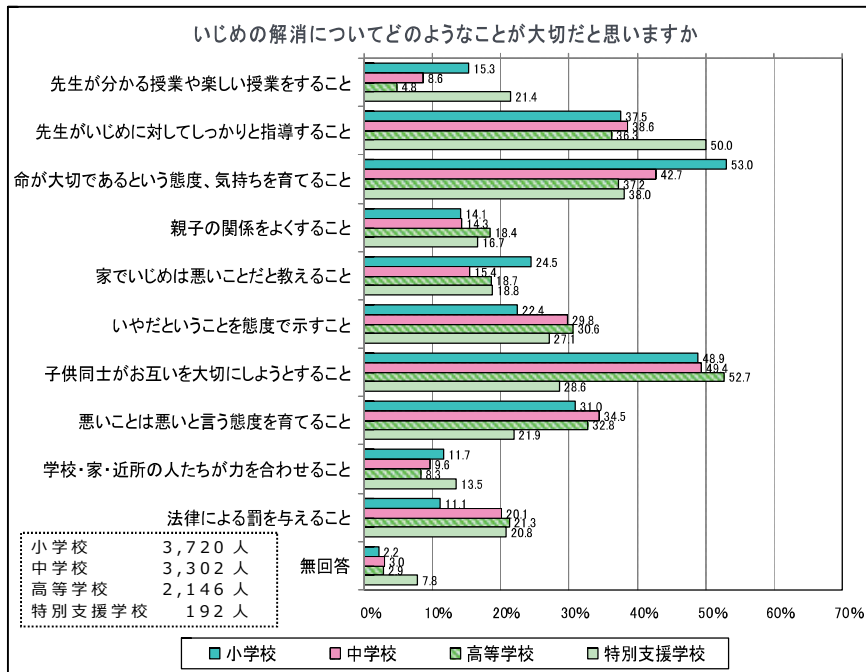


「いらいらしていることが多いですか」という質問に、平成7年度では小学校で36.0%、中学校で45.0%が「おおいにそう思う」、「そう思う」という回答をしていた。平成24年度では、小学校で42.3%、中学校で46.8%であった。高等学校では49.6%、特別支援学校では、57.3%であった。

いじめの原因については、「ストレスがたまっている」、「子供同士がお互いを大切にしていない」などの子供自身の問題と「先生が一人一人を大切にしない」、「学校のいじめをなくす努力が足りない」などの教員や学校の対応の問題が挙がっており、両面で考えていく必要がある。また、いじめの原因として挙げられている「ストレスがたまっている」ことは、「いらいらしていることが多い」に関連があると考えられる。

●いじめの解消のために大切なことについて

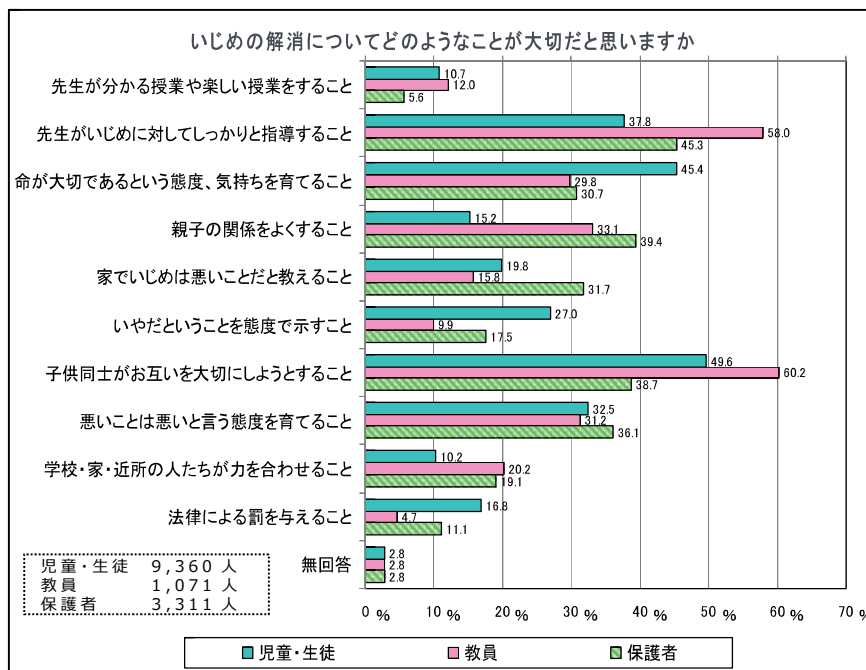
(小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の児童・生徒) 【複数回答(選択3つまで)】



「いじめの解消について、どのようなことが大切だと思いますか」に対して、「先生がいじめに対してしっかりと指導すること」の項目は、どの校種においても35%を超えている。

「子供がお互いを大切にしようとする」との項目では、特別支援学校は28.6%であるが、小学校、中学校、高等学校では約50%となっている。

●いじめの解消のために大切なことについて(児童・生徒、教員、保護者)



【複数回答(選択3つまで)】

児童・生徒、教員、保護者共に「子供同士がお互いを大切にしようとする」、「先生がいじめに対してしっかりと指導すること」、「悪いことは悪いと言う態度を育てること」が大切であると思っている。

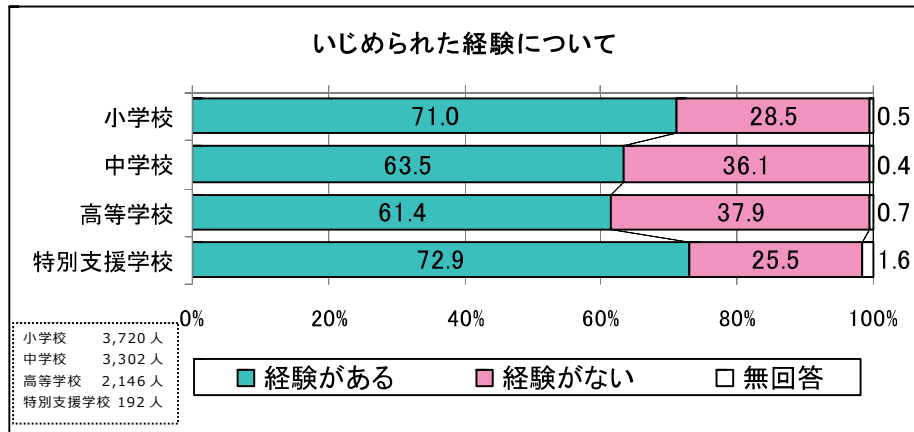
保護者においては、「親子関係」、「地域社会との関わり」が大切であると捉えている。

いじめの解消について、児童・生徒、教員、保護者共に、「子供同士がお互いを大切にしようとする」、「先生がいじめに対してしっかりと指導すること」、「悪いことは悪いという態度を育てること」が大切であると思っている。

保護者は「親子関係」や「地域社会との関わり」が大切であると捉えている割合が多いことから、家庭の教育力の向上に向けた取組を学校から発信し、児童・生徒のよりよい成長を支えていかななくてはならない。

### 3 いじめられた経験の有無とそのときの気持ちについて

#### ● いじめられた経験について（児童・生徒）【単数回答】

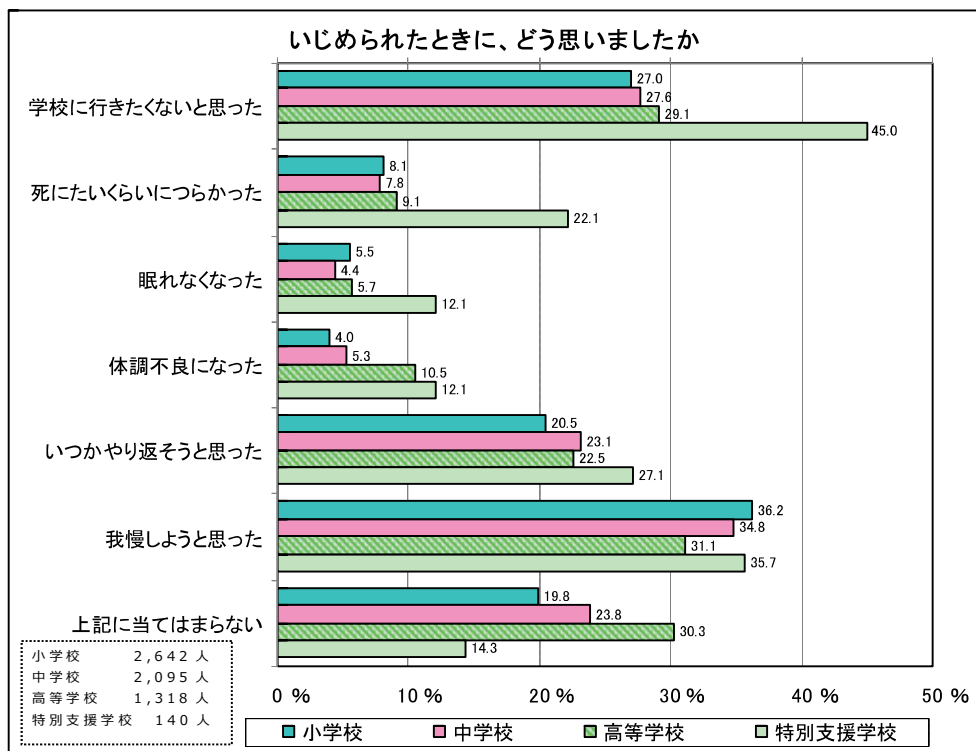


児童・生徒 9,360 人に対して、「冷やかし、からかい」等の行為を、期間を限定せずに受けたことがあるかを尋ねた。

その結果、いじめられた経験があると回答した児童・生徒は 6,195 人となり、どの校種も 60% を超えている。小学校及び特別支援学校においては 70% を超える児童・生徒がいじめられた経験があると回答している。

#### 〈いじめられた経験がある児童・生徒〉

#### ● いじめられたときの気持ちについて 【複数回答】



いじめられた経験がある児童・生徒に、いじめられたときの気持ちを質問したところ、「我慢しようと思った」が、どの校種も 30% を超えている。

「死にたいくらいに悩んだ」と回答した児童・生徒は、全校種で 7% 以上の割合であったが、特別支援学校の児童・生徒は、22.1% と他校種に比べて高い割合にある。

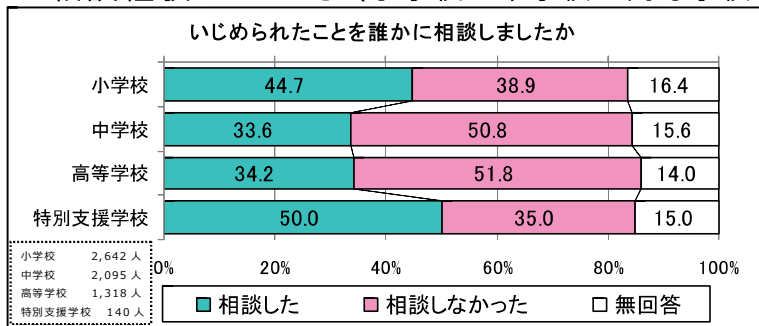
いじめられたときの気持ちに対する質問に関しては、複数回答のため、幾つかの項目に回答している児童・生徒もいた。

「我慢しようと思った」の項目に関しては、いじめられても我慢していることによって、「眠れなくなる」、「体調不良になる」など、深刻化することも考えられる。そのため、我慢せず、誰かに伝えることが大事であることを児童・生徒に教えていく必要がある。

## 4 相談の経験について

〈いじめられた経験がある児童・生徒〉

### ● 相談経験について（小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の児童・生徒）



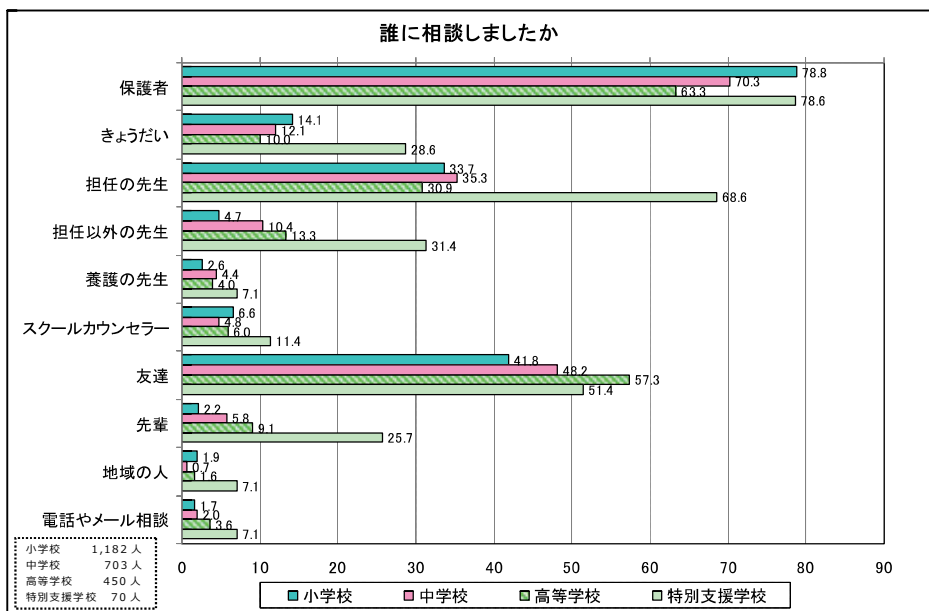
【単数回答】

いじめられた経験がある児童・生徒のうち、いじめられたことを誰かに相談したかどうかについての設問では、全体の45.6%の児童・生徒が相談をしなかったと回答した。

特別支援学校の児童・生徒は、50.0%が相談したと回答している。

〈いじめられたことを誰かに相談した児童・生徒〉

### ● 誰に相談しましたか（小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の児童・生徒）



【複数回答】

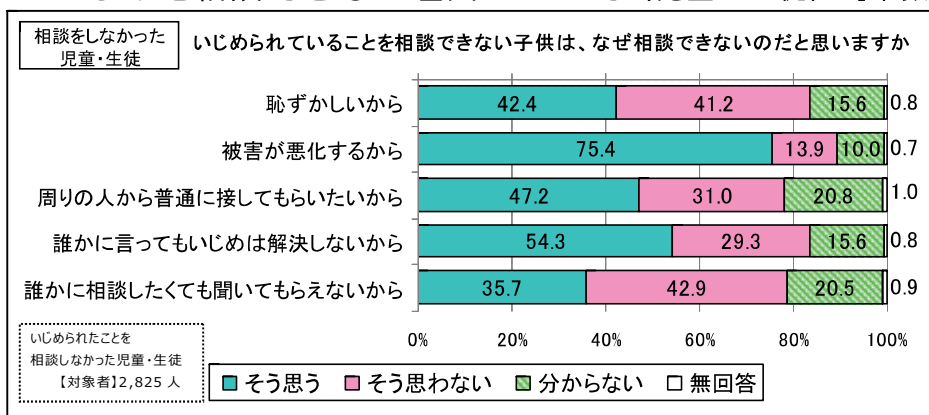
いじめを相談した相手で一番多かったのは保護者で、どの校種も60%以上の割合を示している。次に多かったのは、友達で、どの校種も40%以上の割合を示している。

スクールカウンセラーへの相談は、全体で6.1%となっている。

また、電話やメールの相談は全体で2.3%にとどまっている。

〈いじめられたことを誰にも相談しなかった児童・生徒〉

### ● いじめを相談できない理由について（児童・生徒）【単数回答】



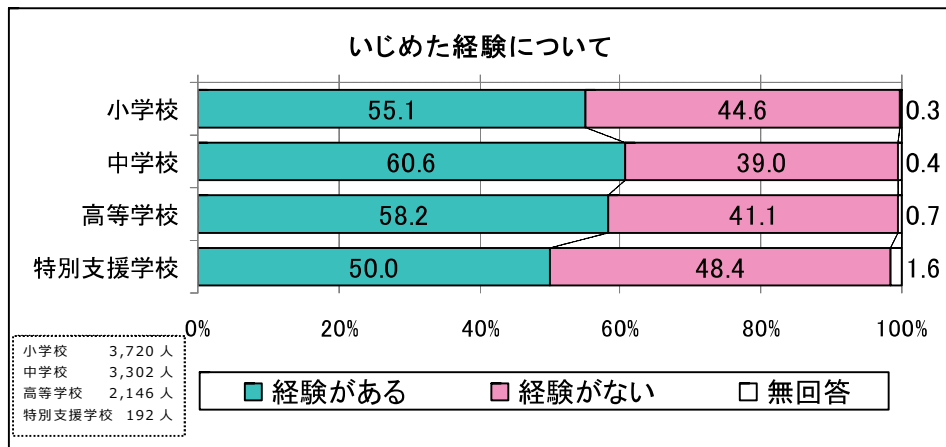
相談しない理由に関して、「被害が悪化するから」の割合が75.4%と高く、「誰かに言ってもいじめは解決しないから」は、54.3%であった。

「恥ずかしいから」という回答は、42.4%であった。

児童・生徒には、相談していじめが解決したり、状況がよい方向に進んだりしたという経験を増やすことが大切だと考える。また、発達段階を考慮すると、中学校・高等学校では相談する機会を意図的に増やすことなど、悩みを話しやすい相談環境をつくっていくことが重要である。

## 5 いじめられた経験といじめた経験の関係等について

### ● いじめた経験について（児童・生徒）【単数回答】



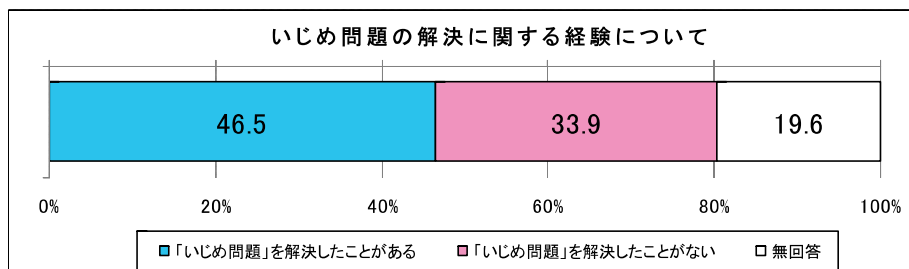
児童・生徒 9,360 人に対して、「冷やかし、からかい」等の行為を、期間を限定せずに行ったことがあるかを尋ねた。その結果、いじめた経験があると回答した児童・生徒は 5,395 人で、どの校種も 50% を超えている。

### ● いじめられた経験といじめた経験の関係について（児童・生徒）

|               |     | いじめられた経験       |                |             | 合計人数<br>( )は%   |
|---------------|-----|----------------|----------------|-------------|-----------------|
|               |     | ある             | なし             | 無回答         |                 |
| いじめた経験        | ある  | 4391<br>(46.9) | 983<br>(10.5)  | 21<br>(0.2) | 5395<br>(57.6)  |
|               | なし  | 1790<br>(19.1) | 2125<br>(22.7) | 7<br>(0.1)  | 3922<br>(41.9)  |
|               | 無回答 | 14<br>(0.2)    | 7<br>(0.1)     | 22<br>(0.2) | 43<br>(0.5)     |
| 合計人数<br>( )は% |     | 6195<br>(66.2) | 3115<br>(33.3) | 50<br>(0.5) | 9360<br>(100.0) |

いじめられた経験といじめた経験との関連については、いじめられた経験といじめた経験がどちらもない児童・生徒は、2,125 人で、全体の 22.7% であった。それ以外のほとんどの児童・生徒はいじめに関わっている。

### ● いじめを解決した経験について（教員 1,071 人）【単数回答】



教員 1,071 人に、いじめを解決した経験があるかを尋ねたところ、解決したことがあると回答した教員は、498 人で全体の 46.5% となっている。

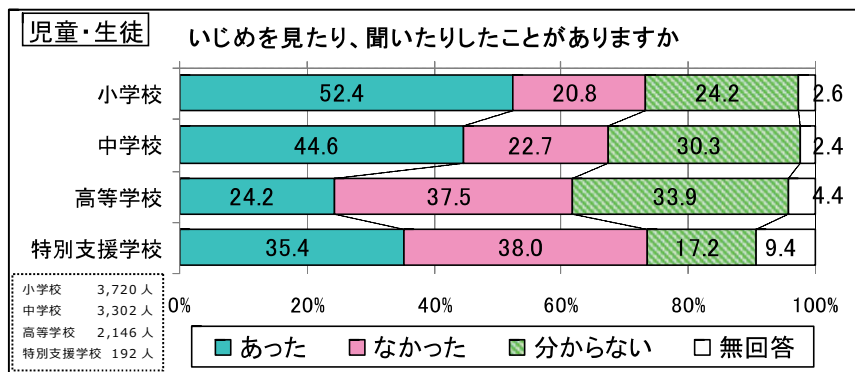
いじめられた経験といじめた経験との関連では、半数近くの児童・生徒が両方を経験している。このことから、いじめ問題を解決するためには、どちらか一方だけの指導ではなく、いじめられた子供、いじめた子供の双方への指導を適切に行っていく必要がある。



## 6 いじめを見たときの行動、理由について

### ● いじめを見たり聞いたりした経験とその時の行動について

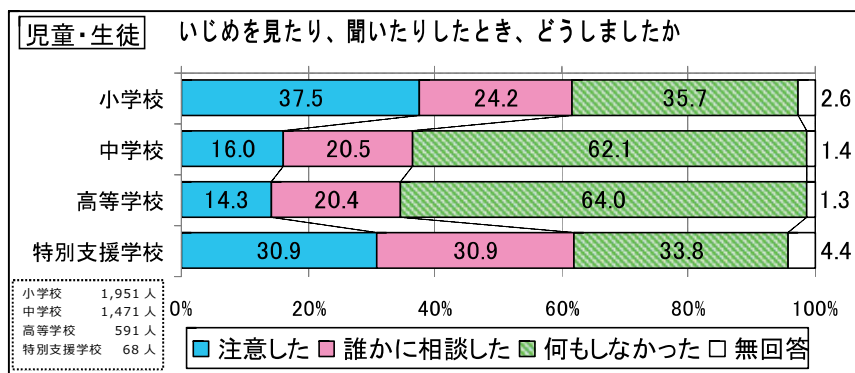
(小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の児童・生徒) 【単数回答】



「いじめを見たり、聞いたりしたことがあった」と回答した児童・生徒の割合は、小学校 52.4%、中学校 44.6%、高等学校 24.2%、特別支援学校 35.4%であった。

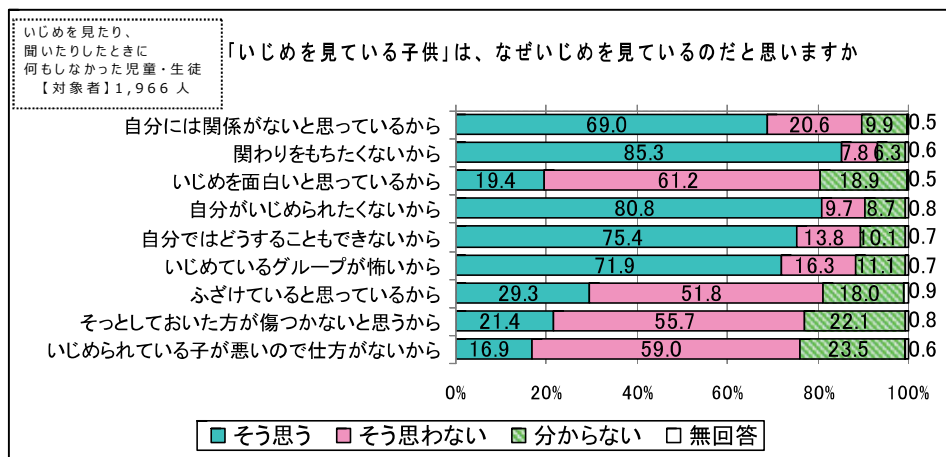
「あった」と回答した児童・生徒に対し、「いじめを見たり、聞いたりしたとき、どうしましたか」と質問したところ、「何もしなかった」と回答した児童・生徒の割合は、小学校で 35.7%、中学校で 62.1%、高等学校で 64.0%、特別支援学校で 33.8%で、全体では 48.9%であった。どの校種においても「いじめ」は存在し、半数近い児童・生徒が見たり、聞いたりしていることが分かる。しかし、児童・生徒が「いじめ」に気付いても、中学校・高等学校においては 60%以上の生徒が、小学校・特別支援学校においても約 40%の児童・生徒が「何もしなかった」と回答している。

#### 〈いじめを見たり、聞いたりしたことがある児童・生徒〉



#### 〈いじめを見たり、聞いたりしたときに、何もしなかった児童・生徒〉

### ● いじめを見ている理由について (児童・生徒) 【複数回答】



児童・生徒が、「いじめを見ている」理由の項目のうち、「関わりをもちたくない」、「自分がいじめられたくない」の2項目は、80%を超えている。また、「自分ではどうすることもできない」、「いじめているグループが怖い」の項目の割合は、70%以上である。

児童・生徒が「いじめを見ている」理由として挙げた「関わりをもちたくない」、「自分がいじめられたくない」の項目に関しては、児童・生徒は自分にいじめの被害が及ばないように何もしない傾向があると考えられる。

また、「自分ではどうすることもできないから」、「いじめているグループが怖いから」を理由に挙げていることから、児童・生徒に、いじめ解決のためには、大人に伝えることが大切であることを指導していく必要がある。



## 7 いじめの経験と自尊感情との関連等について

### ● いじめた経験やいじめられた経験と自尊感情の傾向との関連について

東京都教職員研修センターで開発した自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」の 22 項目の結果といじめた経験やいじめられた経験との関連を見るために、個別の結果を分類・整理した。

「自尊感情」の定義（東京都教育委員会）

「自分のできることとできないことなどすべての要素を包括した意味での「自分」を他者とのかかわり合いを通してかけがえのない存在、価値ある存在として捉える気持ち」

自尊感情を構成する因子を分析し、3つの観点に分け、その観点に基づいて自尊感情の傾向を把握している。

#### 自尊感情の三つの観点

- A 自己評価・自己受容 自分のよさを実感し、自分を肯定的に認める  
 B 関係の中での自己 多様な人との関わりを通して、自分が周りの人の役に立っていることや周りの人の存在の大切さに気付く  
 C 自己主張・自己決定 今の自分を受け止め、自分の可能性に気付く

#### 自己評価シート

児童・生徒が「私は今の自分に満足している」などの 22 の質問項目に対して、自分の気持ちに近いものに「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」などの回答をする。回答した結果は A B C の 3 つの観点ごとに集計することができる。

### 「いじめた」と「いじめられた」の組み合わせによる自尊感情 3 得点の比較（4 点満点） 〈いじめた経験がある児童・生徒〉

|             | 今いじめられている（調査時） | いじめられた経験がある | いじめられた経験がない |
|-------------|----------------|-------------|-------------|
| A 自己評価・自己受容 | 2.48           | 2.66        | 2.75        |
| B 関係の中での自己  | 2.95           | 3.05        | 3.04        |
| C 自己主張・自己決定 | 2.96           | 2.98        | 2.98        |
| 合計          | 2.80           | 2.90        | 2.92        |

### 〈いじめた経験がない児童・生徒〉

|             | 今いじめられている（調査時） | いじめられた経験がある | いじめられた経験がない |
|-------------|----------------|-------------|-------------|
| A 自己評価・自己受容 | 2.60           | 2.83        | 2.88        |
| B 関係の中での自己  | 3.12           | 3.26        | 3.21        |
| C 自己主張・自己決定 | 2.99           | 3.09        | 3.03        |
| 合計          | 2.90           | 3.06        | 3.04        |

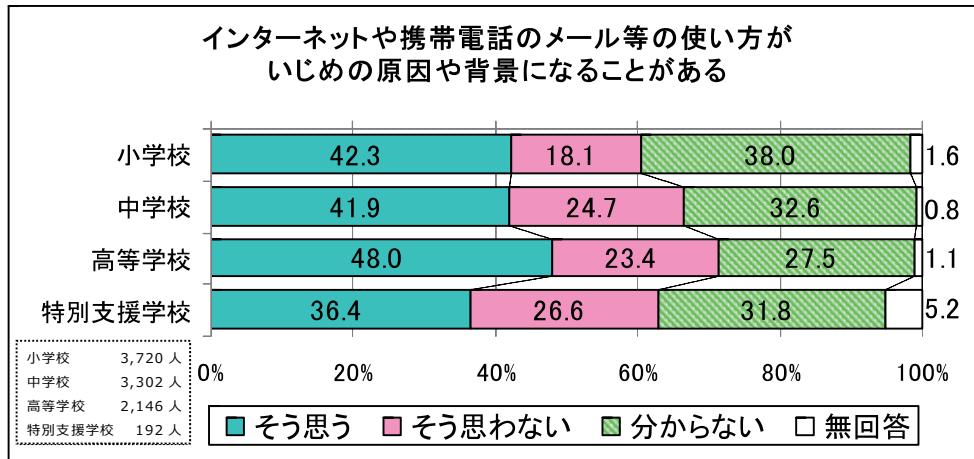
いじめられた経験のある子供は、いじめられた経験のない子供より自尊感情が低い傾向にある。また、いじめた経験のある子供は、いじめた経験のない子供より、どの観点も、自尊感情が低い傾向にある。

いじめの予防の観点から、自分のよさを実感したり、周りの人のよさに気付いたり、今の自分を受け止め、自分の可能性に気付いたりするなど自尊感情の 3 つの観点を高める教育を進めることは大切である。

## 8 インターネットや携帯電話等といじめとの関連について

- インターネットや携帯電話のメール等の使い方がいじめの原因や背景になることがある

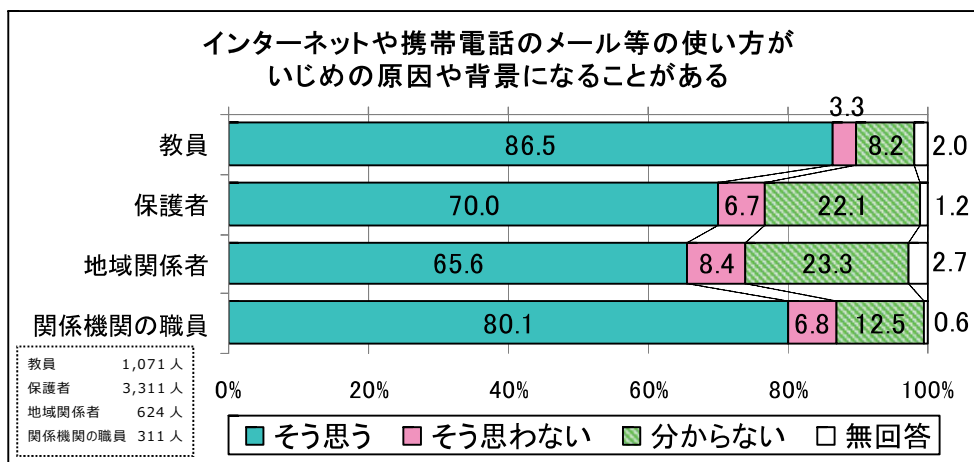
(小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の児童・生徒) 【単数回答】



インターネットや携帯電話のメール等の使い方がいじめの原因や背景になると回答したのは、小学生で42.3%、中学校で41.9%であった。高等学校が一番多く、48.0%の割合である。

- インターネットや携帯電話のメール等の使い方がいじめの原因や背景になることがある

(教員・保護者・都民(地域関係者)・関係機関の職員) 【単数回答】



インターネットや携帯電話のメール等の使い方がいじめの原因や背景になると回答したのは、教員が一番多く、86.5%、関係機関の職員が80.1%であった。地域関係者、保護者は「分からない」との回答が20%を超えている。

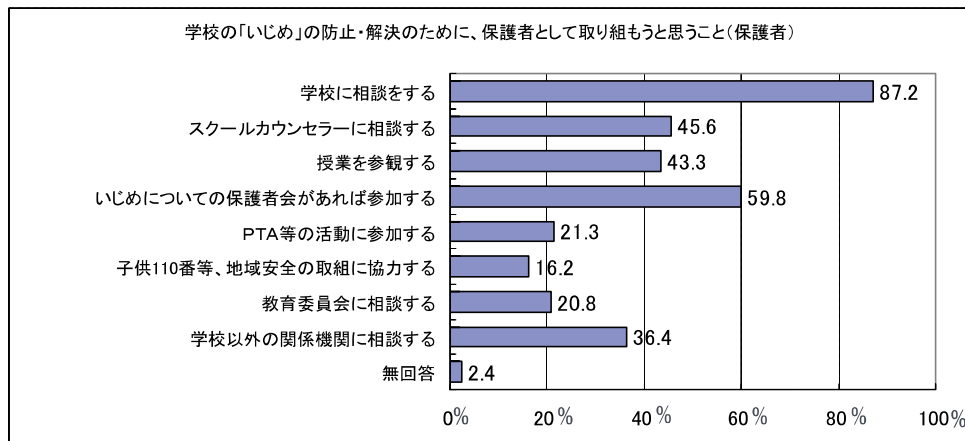
「インターネットや携帯電話のメール等の使い方がいじめの原因や背景になることがある」について、児童・生徒は、教員、保護者、地域関係者、関係機関の職員に比べて、インターネットや携帯電話のメール等の使い方がいじめの原因や背景になるとは考えていないことが分かる。

このことは、児童・生徒がインターネットや携帯電話に関する知識が十分になかったり、学校裏サイト、チェーンメール、掲示板の書き込み等によるトラブルの恐ろしさを十分に認識していなかったりすることが原因として考えられる。

インターネットや携帯電話を活用する情報化社会に生きる上で、児童・生徒に対しては、情報モラルについて、これまで以上に、意図的、計画的に指導する必要がある。

## 9 いじめ防止・解決のために取り組もうと思うことについて

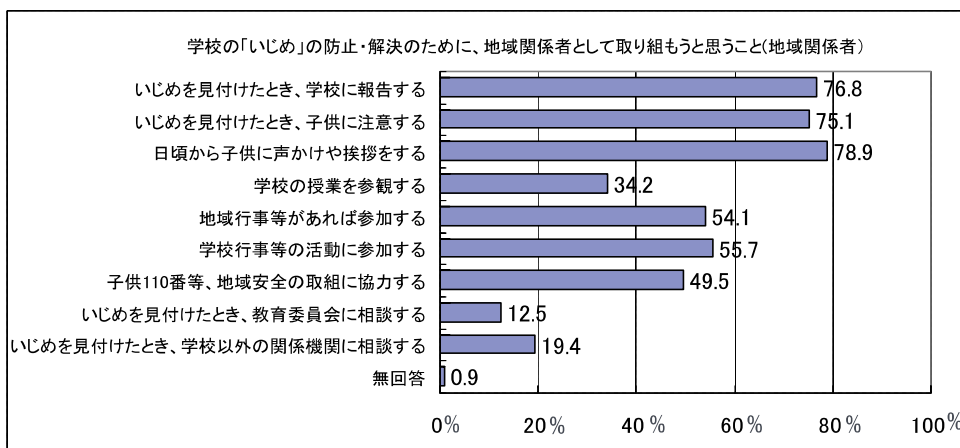
### ● 保護者（3,311人）【複数回答】



学校のいじめ防止・解決のために取り組もうと思うことについて、保護者の回答では、「学校に相談をする」の項目が一番多く、87.2%となっている。

保護者の相談をスクールカウンセラーにつなげられるように、学校はその役割などを更に周知する必要がある。

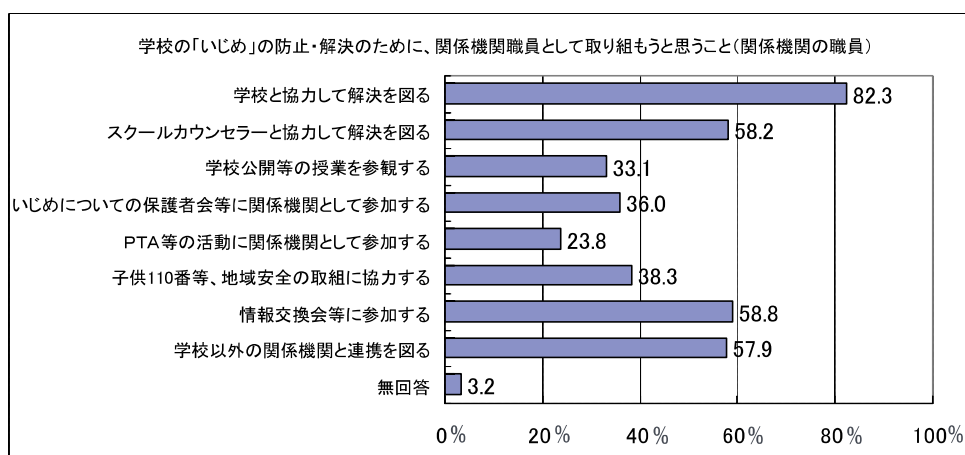
### ● 都民（地域関係者）（634人）【複数回答】



都民（地域関係者）の回答では、「いじめを見つけたとき、学校に報告する」「いじめを見つけたとき、子供に注意する」「日頃から子供に声かけや挨拶をする」がともに75%を超えている。

都民には、学校からの働きかけにより、子供に注意する、声かけや挨拶を行うなどの連携が期待される。

### ● 関係機関の職員（311人）【複数回答】



関係機関の職員の回答では、「学校と協力して解決を図る」の項目が82.3%となっている。

また、「スクールカウンセラーと協力して解決を図る」の回答が58.2%であることから、学校は関係機関職員とスクールカウンセラーとの連携を図ることが重要である。

学校がいじめの未然防止及び早期発見・早期対応を図るためには、保護者・地域の方との連携が欠かせない。

特に、日頃から連絡を密に取り、児童・生徒の少しの変化も見逃さないように情報をお互いに共有できることが、いじめの早期発見につながる。

## 1 0 調査研究のまとめと提案

### ● 調査結果に見る課題の整理

#### いじめについての認識・考え方

- 1 いじめの原因について、児童・生徒が「ストレスがたまっている」と挙げた割合は61.1%である。
- 2 いじめの解消について、児童・生徒・教員・保護者共に「子供同士がお互いを大切にしようとする事」「先生がいじめに対してしっかりと指導すること」「悪いことは悪いと言う態度を育てること」が大切であると思っている。
- 3 いじめられた経験、いじめた経験のある児童・生徒は、経験がない児童・生徒より、自尊感情が低い傾向にある。
- 4 インターネットや携帯電話のメール等がいじめの原因や背景になると思っている児童・生徒は、50%に満たない。

#### いじめに関する相談・対応

- 1 いじめられた経験のある児童・生徒の45.6%がいじめを相談しなかったと回答している。
- 2 いじめを相談した相手で一番多かったのは保護者で、どの校種も、60%以上の割合を示している。
- 3 相談する相手として、スクールカウンセラーを挙げた児童・生徒は6%程度である。
- 4 いじめを相談しなかった児童・生徒の75.4%が「いじめを相談できない子供は被害が悪化するから相談しない」、54.3%が「誰かに言ってもいじめは解決しないから相談しない」と考えている。
- 5 いじめを見ている理由として、「関わりをもちたくない」、「自分がいじめられたくないから」の項目が80%を超えている。「自分ではどうすることもできないから」、「いじめているグループが怖いから」の項目も70%を超えている。

#### 保護者・都民・関係機関との連携

学校のいじめ防止・解決のために取り組もうと思うことについての回答では、保護者は、「学校に相談する」、都民（地域関係者）は、「いじめを見つけたとき、学校に報告する」、「いじめを見つけたとき、子供に注意する」、「日頃から子供に声かけや挨拶をする」、関係機関の職員は、「学校と協力して解決を図る」などの回答の割合が高かったことから、家庭、地域は、いじめの防止・解決のために学校に協力していると考えている。

### ● 課題解決のための提案

#### 児童・生徒の意識の醸成

- 自分自身の気持ちを調節できるような力の育成
- 自他を尊重する意識、態度の育成
- 自尊感情を高める取組の推進
- いじめの影響についての認識及び法的責任の理解

#### 相談しやすい環境づくり

- 相談相手を選べるなど相談環境の充実
- 相談してよかったと思えるような相談しやすい環境づくり

#### 教員の対応力の向上

- いじめ問題に対しての教員による適切な指導

#### 学校体制づくり

- 保護者・都民・地域との連携を図るための体制づくり
- いじめに関する情報を受信するための学校体制の構築